

第 83 回

全国スポーツ施設 研究協議大会

令和5年6月29日(木)

開会式

〔フォトギャラリー〕



主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会
会長 大東 和美



主催者あいさつ

三重県スポーツ施設協会
会長 中西 裕之



祝辞

スポーツ庁参事官（地域振興担当）付
参事官補佐 岡部 将己



歓迎のことば

三重県地域連携・交通部スポーツ推進局
局長 山川 晴久

主催者あいさつ

公益財団法人 日本スポーツ施設協会

会長 **大東 和美**

第83回全国スポーツ施設研究協議大会の開催に当たり、主催者としてごあいさつを申し上げます。

この度は、ご多用のところ、全国各地からご参加をいただき、誠にありがとうございます。昨年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大状況に鑑み、初めてのオンライン開催となりましたが、今年度は、令和元年度以来、久々の集合型での開催となりました。

ご参加の皆様には、日頃から全国各地において、体育・スポーツ施設の環境整備や管理運営を通じて、スポーツの振興・推進にご尽力を頂いておりますこと、この場をお借りして、心から敬意と感謝を申し上げます。

さて、3年余りに及ぶコロナ禍は、人々に生活様式や意識の変化をもたらしましたが、アフターコロナ・ウィズコロナという新たな環境の中で、スポーツを行うことによるストレス発散、健康の維持・向上、人とのコミュニケーションの場となるスポーツの大切さを改めて実感された方も多いかと思います。

昨年4月からは、今後5年間のスポーツ施策の方向性を示す「第3期スポーツ基本計画」がスタートし、国民がスポーツを「する」「みる」「ささえる」ことを真に実現できる社会を目指し、さまざまな関係者との連携、協力のもと、重点的に取り組む施策が打ち出され、今後ますます、全国の体育・スポーツ施設が、我が国のスポーツの振興や地域の活性化などに重要な役割を果たすことが求められています。

また、生徒にとって望ましいスポーツ環境を構築するという観点に立ち、学校運動部活動の地域連携や地域の運営主体によるスポーツクラブ活動への移行により、運動部活動が地域、学校、競技種目等に応じた多様な形で最適に実施されることを目指すという新しい動きも出ています。

その一方、全国の体育・スポーツ施設においては、厳しい財政状況のもと、公共・民間を問わず安全・安心な施設づくりやユニバーサルデザイン化等に対応する施設整備とともに、より効率的な管理運営が求められています。

そのような状況の中、本研究協議大会は、全国の体育・スポーツ施設、行政関係者が一堂に会し、全国のスポーツ施設などに関する最新情報を共有して頂くとともに、スポーツ施設のあり方について意見交換を行い、相互理解を深めることを目的として開催するものです。

全国各地からご参加の皆様には、本研究協議大会を通じ、スポーツ施設に関する諸課題についてご研鑽いただき、今後とも体育・スポーツ施設の整備・充実、安全で効率的な施設運営に、より一層のご尽力をいただきますようお願い申し上げます。

終わりに、本大会を開催するに当たり、スポーツ庁をはじめ、三重県、三重県スポーツ施設協会並びに関係各位のご協力に心から御礼を申し上げ、あいさつといたします。

主催者あいさつ

三重県スポーツ施設協会

会長 **中西 裕之**

本日、第83回全国スポーツ施設研究協議大会が、この三重において盛大に開催できましたこと、関係の皆様方に心より感謝を申し上げます。

三重県では、令和3年に予定されておりました「三重とこわか国体・三重とこわか大会」の成功に向け、県内が一丸となり、スポーツを取り上げ、取組を進めてまいりました。残念ながら、46年ぶりの国体は中止となってしまいましたが、今までの準備や取組により、競技力の向上はもとより、スポーツ施設の充実という素晴らしいことが遺されました。今後は、さらなるスポーツ施設の発展と安全で安心な運営が求められております。

この研究協議大会におきましては、全国各地のスポーツ施設の情報の共有や施設のあり方など、これからにつながる協議がなされることと期待しております。

最後に、ご参加された皆様、この三重を充分に楽しんでいただき、参加された皆様にとって価値のある2日間になることを祈念いたしまして、あいさつとさせていただきます。

祝 辞

スポーツ庁参事官（地域振興担当）付

参事官補佐 **岡部 将己**

本日、第83回全国スポーツ施設研究協議大会が盛大に開催されますこと、心よりお祝い申し上げます。また、ご参加の皆様方におかれましては、日頃より安全で魅力的なスポーツ施設の管理・運営にご貢献いただいておりますこと、お礼申し上げます。

特に本日、多年にわたるご尽力に対し表彰を受けられるスポーツ施設功労者の皆様、スポーツ施設の設計・施工、器具・機材の質的向上に関する優れた取組として、スポーツファシリティーズ大賞を受賞される皆様におかれましては、お礼とお祝いを申し上げたいと思います。

さて、東京オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーの発展に向けて、令和4年3月25日に第3期スポーツ基本計画が策定され、1年が経過しました。

スポーツ庁といたしましては、①スポーツを「つくる／はぐくむ」、②「あつまり」、スポーツを「ともに」行い、「つながり」を感じる、③スポーツに「誰もがアクセス」できるといった「新たな3つの視点」を基軸として、具体的な施策を推進しております。

この推進にあたっては、スポーツ環境の充実が欠かせませんが、それは裏をかえせばスポーツ施設の役割、スポーツ施設への期待が、スポーツ振興やスポーツ人口の拡大を超えて大きくなってきているということでもあります。

「地域において、住民の誰もが気軽にスポーツに親しめる『場』づくり」の実現、そしてスポーツを通じて地域を元気にする、スポーツによって地域の課題を解決するといった「スポーツ・健康まちづくり」の実現に向け、スポーツ施設の量的な充実を図っていくとともに、社会や住民のニーズの変化に応じて質的な充実についてもなお一層取り組んでまいります。

この質的な充実は、まさに皆様が常日頃から取り組まれていることが可視化され、住民の皆様に実感されるようになってきているというふうに考えています。今後とも皆様の新しい取組を応援し、また色々な創意工夫を勉強させていただきながら、より良いスポーツ環境の創出を進めてまいりたいと考えていますので、一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりますが、本大会の開催にご尽力されていらっしゃいます公益財団法人日本スポーツ施設協会、三重県スポーツ施設協会、独立行政法人日本スポーツ振興センター、三重県及び関係者の皆様に深い敬意とお礼を申し上げ、また本会の盛会を祈念いたしまして祝辞とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございます。

歓迎のことば

三重県地域連携・交通部スポーツ推進局

局長 **山川 晴久**

第83回全国スポーツ施設研究協議大会が、三重県において盛大に開催されますことをお慶び申し上げますとともに、全国各地からお越しいただきました多くの皆様に心より歓迎いたします。

近年、人口減少や少子高齢化など、スポーツを取り巻く環境は大きく変化し、スポーツ施設についても、スポーツの振興だけでなく、地域の賑わいをもたらすことなど、求められるニーズも多様化しています。

こうした中で、今後のスポーツ施設のあり方について研究協議を行い、理解を深めることは、大変有意義なことであり、本日ご参加の皆様におかれましては、本大会を実り多いものとしていただきますことをご期待申し上げます。

結びに、本大会のご成功と、本日お集まりの皆様のご健勝とご活躍を祈念して、歓迎のことばといたします。

第6回 スポーツファシリティーズ大賞表彰

〔フォトギャラリー〕



スポーツ庁長官賞

施設計画部門

京都府立京都スタジアム

株式会社東畑建築事務所



公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞

施設計画部門

栃木県総合運動公園陸上競技場

株式会社久米設計



公益財団法人日本スポーツ施設協会 会長賞

施設計画部門

有明アリーナ

東京都生活文化スポーツ局

令和5年度 スポーツ施設功労者表彰

[フォトギャラリー]

▽表彰状受賞者

加盟団体	53名
特別会員	15名
特別会員部会部会長推薦会社	4社

▽感謝状受賞者

本協会役員等	3名
加盟団体事務担当者	3名
長期継続特別会員	1社
特別会員部会部会長推薦	7名
本協会推薦	1社



表彰状受賞者代表

三重県 山口 貴史



表彰状受賞者代表
株式会社ショウエイ



感謝状受賞者代表

日本体育施設株式会社 小松 和幸



感謝状受賞者代表
泉州敷物株式会社



代表者謝辞

三重県 東浦 久修

部活動の地域連携

一般社団法人カルティベータ

代表理事

宮嶋 泰子



はじめに

私は、アナウンサーやコメンテーターとして「ニュースステーション」や「報道ステーション」で番組を作る仕事をしてきた。その他、社外では文部科学省の中央教育審議会スポーツ・青少年分科会の仕事もしていた。日本バレーボール協会や日本新体操連盟、バスケットボールのBリーグなど競技団体の理事のほか、現在は全日本柔道連盟のコンプライアンス委員などもしている。

2020年、ちょうどコロナ禍が始まった頃、私はテレビ朝日を退職して、一般社団法人カルティベータを立ち上げ、今のように情報発信をしている。

地域移行・地域連携が検討される背景

文部科学省は、2023年4月から土日皮切りに部活動の地域移行を徐々に進め、3年かけて全曜日で移行し、中学校が終わったら高校でも移行していくと意気込んだ。このあたりは皆さんもご存じだと思う。

このバックグラウンドには何があるのかというと、一つは少子化である。全国の公立中学校の生徒数は平成の30年間で約4割減り、学校数は約1割減少した。1校の在籍人数も大幅に減っているのを、一

つの運動部活動当たりの生徒数が激減しており、学校単位では団体スポーツのチームが組めない状況になっている。これは15年ぐらい前から起こってきた現象だ。

それから、教員の働き方改革も背景にある。教師は平日の放課後遅くまで練習に付き合っ、土日は大会に参加。しかも、やったことのない競技を担当させられるという、普通では考えられない状況になっている。

2022年6月、スポーツ庁の「運動部活動の地域移行に関する検討会議」が提言を発表した。部活動の地域移行の背景となっている状況はさらに深刻化している。少子化は当然深刻なのだが、日本の学校教員は残念ながら世界一の長時間労働であり、全国平均で80%の教員が「部活動を外に出してほしい」と言っている。しかしながら、2割の「部活をやりたい」「部活をやるために教員資格を取った」という人がいるのも現実である。

ここからが重要で、学校がある意味治外法権のようになっていて、外の人が自由に入れず、閉ざされた空間になっている。すると何が起るかということ、ハラスメントや暴力事件が非常に増えて、自殺者も増加するような状況になっている。

それから、学校の名前を上げるために何としてでも勝つという勝利至上主義が蔓延している。現在指

摘されているのは、全国大会の見直しである。実はヨーロッパでは、16歳以下の全国大会が一切ないのである。それには、身体の発達のことなどさまざまな理由がある。

新たなスポーツ環境のあり方と構築方法

学校部活動の地域連携の想定される連携先として注目されているのが、総合型地域スポーツクラブである。他の実施団体としてはスポーツ少年団、クラブチーム、プロスポーツチーム（例えばJリーグやBリーグの下部組織）、民間事業者、フィットネスクラブ、それから施設を開放していろいろなクラブ活動を行っている大学など、そうした所が受け皿になっていく。さらに学校関係の組織・団体、要するに地域学校協働本部や保護者会なども想定している。

スポーツ庁は、総合型地域スポーツクラブなど地域の皆さんで、医師も関わり、団体を結ぶコーディネーターもいると便利だと言っている一方、経済産業省は、いかにビジネスに結び付けるかということで企業のクラブや派遣業者を挙げ、こういうところから指導者を派遣してもらいたいのではないかと提案している。

活動内容としては、一つの競技に専念するだけでなく、いろいろなものを体験していくことが大切である。ちょっとでもやった経験がある競技があれば、そのスポーツをやってみようという気になる。そういう意味で、中学時代にありとあらゆるスポーツを体験するといいと思う。それから活動場所に関しては、もちろん公共施設のほか、学校施設も使えることになっている。

これからの構築方法としては、まずは休日、そのうち全曜日に拡大するのだが、やはり市町村が中心になって考えていくことが必要である。市町村ごとに考え方も違うし、過密・過疎の度合いも違うし、子どもたちの人数などいろいろな問題があるし、そ

こに受け皿となるクラブがあるのかどうかも異なる。条件が百あれば百通り違うので、そこに合ったものを模索していくしかないと思う。

今問題になっているのが指導者謝金である。実践例としては、1時間当たり2,000円程度といわれている。学校の先生が授業以外で部活動を指導すれば、謝金も受け取れるようにする。ただ、ドイツなどは1円も要らないというボランティアの人たちに支えられている。クラブはボランティアが何人いるかによって州から補助金が出て、その補助金は本人ではなく、クラブに入るところが主である。

国の方針が昨年暮れに変更になった。最初は地域移行と言っていたのだが、地域連携と言い出したのもこのときである。「市町村が外部の団体と連携して指導者を派遣する」「総合型地域スポーツクラブや民間事業者が指導する」という項目があったのだが、新たなガイドラインでは「これらが難しい場合には、合同部活動の導入や部活動指導員等によって機会を確保すればよい」という文章が加えられた。

地域移行のメリットとしては、まず、生徒は継続して練習することができる。中学を卒業したら終わりではなく、高校に入っても同じ人たちと地域でプレーできるのはいいことである。それから、教員は異動に左右されずに指導できる。これは大きい。学校の先生はだいたい3年、長くて5～6年で替わってしまう。そうすると、せっかく指導してきたのに、異動したらまたゼロから指導しなければならない。さらに、異世代交流の場にもなる。新たな交流の場ができることは人間形成の上でも大切だ。

では、大会やコンクールはどうになってしまうのかというと、今までは学校単位だったのだが、これからはクラブも参加できるようになる。しかし、いろいろなところで問題が起きている。ちょっとしたことで参加できないようなクラブが発生しているところもあるようだ。

これは、やはりコンセプトを理解せずにディテ

ルにこだわっているからである。なぜ地域移行が行われて、地域移行は何を目指しているのかということを皆さんに知ってほしい。私は今日そのために来た。

それから、運動やスポーツを小中高で行うことが特に重要だと私は思っている。ちゃんとその時代にやらないと、今は人生100歳まで生きるはずなのに、70歳ぐらいから骨がどんどんぼろぼろになってしまう。特に女性はホルモンの関係から、20歳までに骨を強くすることが喫緊の課題である。

ということで、地域住民が主体的に子どもたちのスポーツ環境をサポートすることの大切さを皆さんに知ってほしい。

日本と海外のスポーツの成り立ちの違い

部活動は教育か余暇かという問題があるが、両方内包している。実は部活動は日本独自の成り立ちを持っている。日本と海外のスポーツの成り立ちの違いを見ると、今回なぜ地域に移行することになったのかということがお分かりいただけると思う。

日本の運動部活動の成り立ちは1870年代。明治時代の招聘外交人「お抱え外国人」といわれる人たちが日本にたくさん来て、英語や哲学などいろいろなことを教えた。そのときにイギリス人がボートクラブをつくり、他にも野球などいろいろなスポーツを教えたのである。そして今度は大学生が中学生、高校生に教えていくという形で、どちらかといえば学校でスポーツが伝えられ、学校の中で行われる部活動がスポーツの中心になっていったのである。

アメリカも1900年ごろ、遊び場運動を学校中心でやろうという時代があったが。最終的には郊外型のレクリエーションが発展した。アメリカやドイツでは、都市計画の中にスポーツ施設がきちんと組み込まれている。これが欧米では当たり前になっているのだ。

スポーツで育てる新しい若者たち

部活動の地域移行というのは、場所が学校から地域に変わるだけではなく、スポーツという概念そのものを変えていくことなのだとすることを、今日は皆さんに知っていただきたいと思って私はここまで話してきた。

ドイツのスポーツクラブでは、いろいろな街の人たちが一緒になって、大人はビールを飲んでいるし、おじいちゃん、おばあちゃんはいるし、地域のクラブに行って初めて子どもたちは民主主義を学ぶのである。社会というのはこうなっていて、いろいろな人がいて、いろいろな意見があって、民主主義はこうなのだとすることを学ぶことが、これから日本の部活動で行われていく可能性があるのだ。

やはり日本のスポーツは、どうしても競技スポーツや学校体育が中心で、勝利至上主義になっている。しかし、各国は競技スポーツからすでに脱している。ドイツもフィンランドもスウェーデンも、健康になるためにはスポーツや身体活動が必要なのだと認識している。みんなコロナ禍による運動不足で大変な目に遭ってしまったのである。運動しないと人間は本当に腐ってしまう。いかに運動させるかということに世界中がシフトしているということをもっと知ってほしい。

日本の部活動も、競技スポーツと一体になって、生涯スポーツとか競技スポーツとか分けをするのではなく、みんながちゃんと使命を持って身体を動かし、身体活動の大切さを理解してスポーツにいそしんでいく社会が、これからの日本には求められているのだと思う。

パラスポーツとスポーツ施設

日本福祉大学スポーツ科学部
教授

藤田 紀昭



はじめに

障害者スポーツ（パラスポーツ）は、障害がある人だけがする特別なスポーツと思われるかもしれないが、そうではなく、障害のある人となない人が一緒にでき、障害のある人がうまく工夫してできるスポーツである。

そもそもスポーツはさまざまな制限の中で行われる。障害者スポーツ（パラスポーツ）はその制限がやや大きいと考えればいい。日常生活で行う運動からパラリンピックのようなトップレベルのスポーツまである。ポイントは、ルールや用具、やり方を修正（アダプテッド）すること。少し修正することで一緒にプレーでき、障害のある人も参加できるようになる。

私たちが目指す社会のあり方

私たちが目指す社会のあり方の一つが共生社会である。多様な人を受け入れる方向を向いているのか、排除する方向を向いているのが一番のポイントである。ダイバーシティ&インクルージョン（多様性と包摂）、東京2020大会では「多様性と調和」という言い方をしていたが、これも同じような言葉だと思う。そうした多様性を受け入れる方向を私たち

の社会は目指し、国際オリンピック委員会（IOC）も国際パラリンピック委員会（IPC）もそうしたスポーツの世界を目指している。

ただ、受け入れるためにはさまざまなせめぎ合いがある。スポーツ施設が障害のある人もない人も完璧に受け入れるとしたら、スロープを作り、トイレも改修しなければならない。しかし、あれもこれもやる予算はないので、どこで折り合いをつけていくということになる。その落としどころを見つける過程が非常に重要だと思う。

スポーツ基本法では「利用者の需要に応じたスポーツ施設の運用の改善、スポーツ施設への指導者等の配置その他の必要な施策を講ずるよう努めなければならない」。さらに、「前項の規定により、スポーツ施設を整備するに当たっては、当該スポーツ施設の利用の実態等に応じて安全の確保を図るとともに、障害者等の利便性の向上を図るよう努めるものとする」とされている。この基本理念に基づき、性別、年齢、障害の有無等に関係なく、地域において誰もがスポーツ施設でスポーツをすることができる環境を整備していくことが求められている。

この基本法をもとにした第3期スポーツ基本計画では、「誰もがアクセスできる場を形成する」ことや「国民がスポーツに親しむうえで不可欠となるハード・ソフト・人材が必要」ということが書かれ

ている。また、地域において住民の誰もが気軽にスポーツを楽しめる場づくりの実現、老朽化対策などで再整備するときには個別施設計画の策定を促進していくことも定められている。

また、今後の施策目標としては、「性別・年齢・能力等にかかわらず誰もがスポーツを行いやすくするユニバーサルデザイン化の推進等により、安全で持続可能な地域スポーツ環境の量的・質的充実を図る」ことが打ち出されている。

障害者スポーツ（パラスポーツ）に関しては、第3期スポーツ基本計画策定後の昨年夏に「高橋プラン」が出されている。基本計画の内容を具体的に進めるため「障害者のスポーツへのアクセスの改善に向けて、デジタルトランスフォーメーション（DX）の活用も含め、多面的に取り組む」と書かれ、都道府県等による障害者スポーツセンターの整備を促している。

この高橋プランを具体的に動かすために開いているのが、スポーツ審議会健康スポーツ部会の下につくられた障害者スポーツ振興ワーキンググループである。単に広域レベルごとに一つ以上の障害者スポーツセンターを整備することにとどまらず、そこで学んだ人たちが各地域のスポーツ施設で他の人たちと一緒にスポーツを楽しめるようにすることが考えられている。

地域のスポーツ施設のUD化が不可欠

スポーツ庁は、地域のスポーツ施設のユニバーサルデザイン（UD）化が不可欠だとしてガイドブックを作成している。バリアフリーとUDは何が違うかという点、バリアフリーはもともとあったバリアをなくし、障害のある人や高齢者もスポーツに参加でき、施設に来て楽しめるようにすること。UDは最初からバリアをなくした計画を立てて物事を進めることである。

UDには七つの原則がある。一つ目は公平性。スポーツ施設が誰でも使えて、いろいろなスポーツプログラムを手に入れることができること。二つ目は自由性。柔軟に使用することができ、誰もが利用しやすいこと。三つ目は単純性。使い方が簡単に分かること。四つ目はわかりやすさ。使う人に必要な情報が簡単に伝わること。五つ目は安全性。間違えても重大な結果にならないこと。六つ目は省体力。少ない力で効率的にいろいろなものを使えること。七つ目はスペースの確保。使うときに適当な広さがあることである。

UD化推進に向けたポイント

UD化に向けた五つのポイントとしては、一つ目はすべての人が対象であること。二つ目は計画段階からどのようにすればいいのかという発想で考えること。三つ目はさまざまな利用者のニーズに応じたデザインは多種多様であること。四つ目は利用者の声を把握して落としどころを探すこと。五つ目は対応を検討し絶えず見直し・改善を図ることが重要になる。

スポーツ施設は、PDCAサイクルを繰り返しながらスパイラルアップすることで、ますます良くなっていく。サイクルの各フェーズでは、構想・計画段階、設計・建設段階、管理・運営、改修等の際に配慮すべきことがそれぞれある。

●構想・計画段階

さまざまな利用属性や団体を巻き込んで意見やニーズを把握することが非常に重要となる。

また、行政機関においては、スポーツ部局だけでなく、その他の関係部局と連携して構想・計画づくりを行っていくことが求められる。このことは、施設ができてから運営する際にも影響してくる。連携ができていれば、スポーツだけでなくさまざまな事業をすぐに展開していくことができる。

●設計・建設段階

誰でも使いやすい駐車場になっているか。例えば車いす利用者が濡れずに駐車場から施設に入れるように配慮できているかが問われる。それから身体状況に合わせて利用しやすいトイレやシャワーがあるか。あるいは日本では非常に少ないのだが、土足で入館できるかも重要なポイントなので、検討する余地があると思う。

また、体温調節が難しい人もいる。冷暖房が整備できていればいいが、それが難しい場合でも、体調が悪くなったときに休める部屋があればいい。プールに入るためのスロープが付いているか、分かりやすい案内表示になっているかも重要である。

●管理・運営

段差がある場合、簡易スロープが用意されているか。そのことを来館者に伝える表示や段差を通らずに移動できる迂回ルートがあるか。それから入口にマットを敷いて雨の日でも滑らないようにしているか。車いすで入ったときにタイヤを拭く準備なども重要になる。

ジェンダーへの対応として、トイレや更衣室にパーティションやカーテン等を設置しているか。聴覚障害のある人への対応として、筆談ができるような電子メモパッド等が準備されているか。車いす利用者でも共用できるトレーニングマシンが入っているかということもポイントになる。

利用者による評価

施設のどの部分を利用者が評価しているかを分析した立命館大学・金山教授の論文によると、まず、付帯施設を含めて施設の利用しやすさを視覚的に示してあることを重視している。利用方法をわかりやすく掲示していることが重要である。

それから、スタッフ自らが利用者の立場に共感してわかりやすく情報を提供すること、つまり情報の

UD化である。自ら判断して接客方法やプログラム設定を臨機応変に操作しているかも重視している。誰もが利用しやすい施設には、物理的な要件に加えて利用しやすさを伝える視覚的なコミュニケーションツールとスタッフの共感性が重要だということが明らかにになっている。

既存利用者の理解も非常に重要になる。障害のある人が障害のない人と一緒に活動する際に、理解の度合いにはいくつかの段階がある。まず、違いを拒否する段階。これは法律的に駄目である。次に、配慮を伴わずに表面的な機会を提供しようとする段階。いかにも配慮しているように表面的には繕っているが、実は何もできていない。

その次が、違いに価値を置いて専用の場を設ける段階。最後は多様性を機能させる段階である。これら四つの段階があるが、スポーツ施設のUD化は多様性を機能させる段階になることが求められる。

UD化されたスポーツ施設の事例

UD化されたスポーツ施設の事例を少し紹介する。

●元気フィールド仙台

体育館と温水プールがバリアフリー化され、サブアリーナは障害者優先体育館である。エアコンも付いているが体温調節室が別にあり、そこで調節したり休んだりすることができる。

●鳥取ユニバーサルスポーツセンター「ノバリア」

日本財団と鳥取県の共同事業として、さまざまな当事者が意見を出し合って作られた障害者優先スポーツ施設。体育館は土足で利用でき、最寄りの駅からユニバーサルデザインタクシーを使ってアクセスできる。

●日本福祉大学「SALTO」

私が勤めている大学の施設。障害のある学生もない学生も使いやすくすることをコンセプトに作られている。

三重交通G スポーツの杜 伊勢 陸上競技場の整備にあたって

株式会社安井建築設計事務所
理事 九州事務所長

三好 裕司



計画概要

「スポーツの杜 伊勢」は、伊勢神宮内宮の北側にある五十鈴公園内に位置している。五十鈴公園は都市公園であり、すでに体育館や陸上競技場が整備されていた。緑の多い立地となっており、プロムナードを抜けると正面に陸上競技場があり、その背後の緑は伊勢神宮からつながる森となっている。非常に緑豊かで美しい、杜の中にたたずむ競技場というのが、私が最初に訪れたときの第一印象である。

既存施設は、昭和43年に新築され、設計を開始するときにはすでに築47年が経過していた。メインスタンドは屋根のない形状で約6,000人を収容し、施設の老朽化と最新の陸上競技場としての規定が満足されていないことが課題となり、今回の整備に至った。

整備スケジュールは、2014年9月に設計プロポーザル、いわゆる設計者選定が行われ、弊社に特定していただき、その後1年強をかけて設計を行った。2015年11月からメインスタンドを解体し、2016年3月から新築に入り、2017年10月完成というスケジュールだった。解体から新築まで約24カ月の時間をかけて工事が行われた。

メイン競技場は、メインスタンドを建て替え、サイドスタンドとバックスタンドについては もともと

とあるスタンドを改修し、ナイター競技ができるように照明塔を整備した。さらにメイン競技場の奥にあった補助競技場を手前に移設し、300mだったトラックを400mに整備した。

メイン競技場については、第1種公認競技場の規定を満たすため、メインスタンドを7,000席以上の屋根付きスタンドに改修した。競技場全体では、約1万9,000人収容で整備が行われた。

計画のポイント

我々が何を重視しながら設計にあたったかということを少し紹介したい。五十鈴公園の非常に美しい景観の中に建て替えるので、「杜の中の競技場」という雰囲気を残すためにできるだけ高さを抑え、景観インパクトを最小限にしたいと考えた。そこでドーム型やアーチ型の選択肢もあったが、フラットな形状のスタンドを提案した。

さらに、伊勢神宮の隣の競技場なので、我々は「素の美しさ」という言い方をしていたのだが、架構美をシンプルに見せる競技場を提案した。できるだけ圧迫感につながるような壁面をつくらないように、「木組み」をイメージさせる直線部材を組み合わせて、フレームとフレームの間に奥の風景が何となく透けて見えるようなスタジアムにするというイ

メージを持って計画を提案した。

柱が人文字型になっているのが特徴的で、斜め部材が筋交い的な効果を生んで耐震性を高めており、構造的にも合理的な形になっている。

観覧席を覆っている屋根も特徴的で、奥行が27mあるのだが、できるだけ小さい部材で構成するために、上から引っ張ったり後ろから引っ張ったりしている。これが張弦梁構造で、軽快で軽やかな屋根を計画した。人文字型の柱と屋根を引っ張る細い線材が印象的であり、このような形で緊張感を与えるような競技場ができあがった。これは、設計者である私も意図していなかったのだが、この競技場の外観が「選手同士が手をつないで円陣を組んでいる姿に似ている」といううれしい指摘もいただいている。

観覧席上部の風除け・雨除けの部分には木材を使っている。木やコンクリート、鉄などの素材は覆ったり囲ったりせず、できるだけ素材そのものを見せるというのも、伊勢神宮の隣にある競技場として我々がこだわった点である。スタンドを支える構造体がそのまま外観を印象づけている。

設計者を選定するとき、三重県から出されたテーマとして特徴的だったのは、「工事発注の不調・不落を未然に防ぐための対策を提案する」という点である。このお題はなかなか珍しく、当時は東京2020大会の影響などもあって、全国各地で職人不足を理由に工事発注が不調・不落になる状況が起っていた。そうなる整備スケジュールに遅れが生じるため、県ではこうしたテーマを提案するようになったのである。

そこで我々は、プレ加工やユニット化等、現場で人手がかからないような工法を採用すればいいのではないかという提案をした。普通は現場で型枠を組み立てて、鉄筋を組んでコンクリートを流し込み、固まったら型枠を取る方法をとるのだが、プレキャスト・コンクリートという工場で作ったものを現場で組み立てる工法を採用した。例えばスタンドの

梁や床など、工場で製作したものを車両で運搬できる大きさの単位で運んできて、それを現場で組み立てていくのである。

工場で製作するので、型枠を転用したり、現場に鉄筋や型枠を搬入したりすることがなく、運搬車両を減らすこともできるため、環境負荷低減にも寄与できていると思う。こうした工場製品を合理的に採用しようとする、できるだけ繰り返しが多い方がいい。フラットなスタンド形状を採用したのもそのことを考慮しており、できるだけ同じ部材が繰り返されるようにするためでもあった。また、工場製品は製品精度も寸法精度も非常に良くて高品質なので、長寿命化につながるという利点もある。

設計時の検証（BIM活用）

設計に当たっては、立体なモデル情報を統合するBIM（Building Information Modeling）という設計ツールを使った。国土交通省が推奨しているツールで、当時は三重県からも「BIMを使っていろいろな検証を含めた活用をしてほしい」というオーダーがあり、それに応えた形である。

普通は、図面を描く2次元CADと立体的なイメージをつくる3次元は別々のデータでつくるのだが、BIMは一元的なモデル情報を統合して図面にも活用し、立体的なイメージにも使うツールとなっている。この施設のように複雑な形状であれば、BIMを2次元のメインとして活用するのはとても有効であり、得意とするところでもある。

発注者や関係者にできあがりがどういう空間になるか、どういう形になるかというイメージを共有することも可能である。一般的には設計者が見せたいところを切り取って提示するが、逆に関係者が気になるところや確認したいところなど、必要なときに必要なものを出せるのも魅力だと思っている。

フィールドを改造したときに選手目線でスタンド

に対してどういった見え方をするか、圧迫感はないか。また競技施設なので、観覧席や指令室等からフィールドをしっかりと確認できることも重要である。それをシミュレーション検証することで、視野の確認がしっかりできることにもつながっている。

また、風のシミュレーションも行った。この場所は周辺の地形の特色上、100m走路が午後から向かい風になる傾向があった。しかも結構強い風を受けることもあって、もともとメインスタンドの両サイドが開いていたのを新しいスタンドでは閉じる計画にしたので、どういう効果があるかということを確認した。特に、整備前と整備後で100m走に対する風の影響がどうなるのかをモデリングで検証している。検証上は風を遮る効果はかなりあったのだが、実際どこまで効果が出ているかというのは、明日の施設視察の際に確認したいと思っている。

施設紹介

完成翌年の2018年にはインターハイが予定通り行われたが、2021年の三重国体はコロナの影響で残念ながら中止となった。本来はここで総合開閉会式が行われる予定だった。

施設の1階部分は、主に選手や運営者が利用する場所であり、競技会などでは完全に選手・運営者ゾーンとなるため、ダッグアウト諸室や情報処理室、トレーニング室を収容している。メインフィールドに面して、直接出入りできるような運営諸室が配置されている。また、補助競技場に面して召集室やトレーニング室を配置した。2階については、観客を観覧席に導くためのコンコースやトイレがある。

ちなみに観覧席は1層式である。競技場によっては2層式の観覧席もあるが、どうしても勾配がきつくなるので、安全性も考慮して1層式を選択した。高さを抑えることができることも理由である。

観客は、外部から大階段を上がり、直接2階にア

プローチテラスを介してコンコースに行く動線で、初めて訪れた人へのわかりやすさを意識した。アプローチテラスは、隣の補助競技場を眺められるような関係性となっていて、競技会のときなど選手のウォーミングアップ姿や少し緊張感を持った練習風景を眺めることができる。いわゆる本番とは違う舞台裏が見えるような場所としてアプローチテラスを計画した。予想はしていたが、コンコースは競技会などで選手の休憩場所にも使われるので、十分な広さがある方がいいとあらためて感じた。

3階のスタンド上部は、指令室や写真判定室、そして国体などで皇室の方が訪れることを前提とした貴賓室となっている。指令関係と貴賓室が一般客と交わらないように、専用の階段やエレベーターを配置している。

照明塔は今回設置されたものである。バックスタンドについては、老朽化による雨漏りがあったので防水をしたほか、ベンチシートは更新した。メインスタンドの両端には立ち見デッキを設けた。当然立見でも見られるし、車いすの方の観覧場所となっている。

建設段階のときにちょうど伊勢志摩サミットが行われていた。メディアセンターで使われていた木材や庭にあった敷砂利を再利用したいという要請があり、エントランスホールの内装や玄関まわり、柱の周囲などに敷砂利を活用した。

四日市市総合体育館の整備にあたって

株式会社久米設計
設計本部 建築設計室 上席主管

松尾 敬一



整備にあたっての背景

四日市市は、宿場町・商業の街として栄えてきた歴史がある。戦前は紡績の街、戦時中は海軍燃料の保管場所であり、戦災によって焦土化したこともあった。

昭和30年代後半に石油化学コンビナートや工業地帯として整備され、公害の発生もあったが、緩衝緑地として中央緑地が整備されたという背景がある。現在はクリーンな場所になり、環境的に素晴らしい街になっている。

昭和50年に第30回みえ国体が開催された。それから50年が経過し、施設が老朽化する中で、この場所をどのようにしていくかということで、四日市市から六つの整備方針をいただいた。

- ①三重とこわか国体の体操・新体操、空手道、サッカーの国体施設基準を満たした競技場
- ②競技スポーツの推進の核となる施設
- ③市民の多様なニーズに対応できる施設
- ④誰もが安全安心・快適に利用できる施設
- ⑤災害時の避難所としての防災機能をもつ施設
- ⑥環境負荷の低減に配慮した施設

設計のポイント

私たちは、金属のきらびやかさと木の温かみが

感じられる体育館を追求した。その際に大切にしてきたことは、「ここでしかできないコト」「ここにしかできない場所」をつくることである。

私たち建築家が創造するだけでなく、皆さんが育んできたプロジェクトの本質を見逃さないこと、クライアントが望んでいることや期待していることを理解し、私たちのファーストイメージも大切にしながら常に提案型の姿勢で、多くの関係者と積極的に意見交換していくことを大事にしている。さまざまな関係者の意見を丁寧につなぎ、より良い方向へ建築・場の可能性を最大限に引き出していくことが、みんなが使う環境づくりには大切だと思う。こうした思いのもと、残念ながら開催はできなかったのだが、三重とこわか国体の会場として整備した。

約3,500人の観客席を持つアリーナ、3面のフットボール場のほか、約850台の駐車場も整備し、既存の陸上競技場と第二体育館もうまく活用していく考え方で整備を進めた。

当施設は、名古屋市から約30kmの場所にあり、最寄駅は日永駅と新正駅ということで交通の便が非常に良い場所である。また伊勢湾から約2kmの立地であり、湾に面する工業地域の景観、メタリックな工場景観などと市街地との間の緩衝緑地として、長い時間を経て緑豊かになった歴史がある。計画前は森が非常に豊かであり、いかに体育館に取り入れ

ながら全体計画の中に落とし込んでいくかをテーマに掲げた。

建設エリアを確保するため、大部分は伐採するしかないのだが、可能な限り樹木を移植・存置しながら大事にしたいと考え、どこを残せてどこを移植するのかを丁寧に調査した。実際に伐採した樹木も、木チップ化して肥料化できるので、公園外に捨てずに周りの緑地に撒いたりしていった。

体育館の設計が主軸ではあったのだが、公園全体のあり方を考え、建築やフィールドを取り巻く周辺環境全体が一体的なものとして活性化されている状態をイメージし、丁寧な調査に基づく丁寧な建替ステージを提案した。きちんと整備計画を立てた中で、発注方式も含めて提案してきた。

スポーツの躍動・感動が広がる市民公園として、周りの広場、グラウンド、スポーツフィールドなどが互に関係性を持って展開するような計画を考えた。

「やわらかで優しい表情」「一度見たら忘れられない象徴性」「木漏れ日の中を歩いているような居心地の良さ」をつくりたいと考え、テーマとして場所性・象徴性・快適性を掲げ、「佇まい」がよい建築・「顔つき」がよい建築・「居心地」がよい建築という分かりやすい言葉で、自分にもチーム内にも浸透するよう設定した。具体的には、中央緑地の豊かな森の記憶を継承し、工業都市・四日市市を連想する建築がこの地にふさわしいと考えて設計した。

私たちは、市民が自由に気軽に立ち寄れる空間にすることを最も重要なテーマにしている。体育館を中心に据えて、体育館と多目的室の間にスポーツフォーラムを作り、大きな庇（ひさし）をかけて、全体を駐車場から新正駅に抜ける弓形プロムナードという軸につなげていく。そして、弓形プロムナードからスポーツフォーラムへ入れる場所を50mおきに作ることを計画した。

スポーツフォーラムに対して、更衣室や体育館を長手方向に面させることで、容易に分割利用しやす

い配置により器具庫や会議室、更衣室に直接アクセスできる構成にしている。そうすることで、プロスポーツを誘致したり市民のアリーナに使ったりするときも、いろいろな競技を複数セットできる。

特徴的なのは、弓道場を併設していることである。弓道は静粛性を求められるスポーツであり、最も静かな空間にしなければならない。中庭を介して独立する精神性を高める弓道場独自のアプローチをつくっている。

ウォーキングコースは、観客席の段床の下に水平に展開させた。室内を走ったり歩いたりするコースを設定している施設は多いが、当体育館は中にながら外を感じて運動できることをテーマにしており、いろいろなシーンを見ながら回遊できる。

観客は大階段から3階に動員し、ロビーを通過してアクセスする配置としているが、屋根は約170mの長さがあり、その倍ぐらいの長さのスカイストリートで公園を眺めながら歩くことができる。屋上からグラウンドや芝生で遊んでいる人たちを眺めながら歩けるし、観客席にもなる。

断面構成は、水面に浮かぶ波紋のようなループ状の造形になっていて、屋根・ハイサイドライト・構造フレームが折り重なっているため、さまざまな性格の空間が展開した奥行きのある形状である。

急な落雷など有事の際には、避難の場、暑い時には休憩スペースとして、大きな庇の下の空間を使えるようにしている。多目的室は外からも内側からも利用でき、光と風が抜ける空間にしてある。スポーツフォーラムは「みんなのロビー」として位置付けており、それぞれの施設に直接アクセスでき、自然光が入る空間にしている。こうした奥行きのある構成を実現するため、構造設計に工夫を凝らした。

木の内装デザイン

「豊かな森の記憶」を継承する空間とするため、

感動の輪の重なりと並木の姿を合理的な幾何学で表現した構造に木の内装デザインで彩りを添えていきたいと考えた。

いかに圧迫感を軽減して開放的な空間をつくるかということで、上に昇るにつれてすり鉢状に広がる形態とした。際限なく高まる期待と無限に広がる可能性の表現を追求したわけである。形鋼のルーPLAINと木格子リング、波形折板の調和をつくり、木格子リングはすり鉢状に広がる空間となる。3Dによる3次曲面の検証を行った。

材料は、木目が個性的な唐松を積層材で使い、幅150mm×奥行50mmで3次曲面にうまくなじませる形をとった。コーナー部はよりしなやかに追従させるため、厚みを25mmで重ね、モックアップによる検証をしながら作っていった。

アリーナは、スポーツ競技に支障がない光環境とするため上部ではなく、1階レベルの使いやすい場所、会議室や控室から自然光を採り入れる構成にした。水平ルーバーを丈夫な形で開閉できる建具を考案し、ゴムの積層材を使ってアルミ型材をフレームにしたルーバー扉を作った。災害時の避難所や大会のない市民の日常利用では、空調をかけずに使うことも考え、中庭から光と風が入る。中庭から入る開口部の大きさがどれぐらい必要なのかをシミュレーションし、それらの風を会議室からアリーナや器具庫に流し、ウォーキングコースを經由して外に出すという水平換気を可能にしている。

多目的室は、トラスフレームとビルドHの二つの架構がハイサイドライトやグラウンドが見える水平窓と関係しているので、架構を美しく見せながら木の温もりをどうやって感じさせるかということを考えた。

スポーツフォーラム（ロビー空間）には、鉄骨トラスフレームを縫うように描く自由な木格子を設計している。あまり過度な材料を使わないことに配慮し、30×75mmという小さな断面の木材を使用し

て少ない木材の量で木に包まれた空間を演出することを提案した。屋根と壁に少し隙間を作りながら連続させているので、そういった取り付け部分をどれだけきれいに収められるかというのは現場の作りやすさにもつながる。そのようなことも考えながらやってきた。

きらびやかな金属外装

0.4mmの薄板に折れ加工を施すことで強度を高めた金属を主たる外装とした。薄板のしなやかさを利用して、キャップをはめるような形の嵌合式工法とし、外部にシールを打たないことでシールが原因による劣化や汚れをなくし、打換えなどメンテナンスも長期にわたってしなくて済むようにした。ジョイント部の工夫が建築づくりの醍醐味なのだが、止水性を高めながらすっきり見せることをかなり重視した。

今回は一般的な同心円状ではなく、フィールドからみて右肩上がりに斜めに葺く片嵌合式とした。放射状に流れる雨の性質を使い、表面に凹凸を付けた溝に必ず流れて一方向に排出されるため、雨の原因による汚れも防いでいる。

施工について

施工に関しては、ECI方式で発注している。どのポイントを重視して守っていただく必要があるのかという施工者選定の要項づくりも、非常に丁寧に議論と提案を行い、ポイントを絞ってきた。

最新技術の展開に当たってはBIMを使い、クライアント・設計者・施工者が三位一体で課題を共有する関係をつくって取り組んだ。

本日伝えたいことは、この建築が「成り立ちを考え、構成を全て見せるつくり」としていることである。部活動やスポーツをする多くの若い人たちが集

まる場所になるので、そうした人たちが建築の意匠や構造、設備、ランドスケープが融合した姿を見て心が動かされたり、感動したり、何かの気付きにつながればという思いも込めてみんなで作り上げた環境である。

閉会式

次回開催県あいさつ

栃木県スポーツ施設協会

会長 荒井 浩己



本日は、第83回全国スポーツ施設研究協議大会が、ここ三重県におきまして盛大に開催されましたこと、誠におめでとうございます。また、このあとの情報交換会におきましても、全国のスポーツ施設を管理する多くのご関係者の皆様方がお集まりになり、盛大に開催されますこと、重ねてお祝い申し上げます。

全国の体育・スポーツ施設の関係者が一堂に会し、スポーツ施設のあり方について研究協議を行うことは大変有意義でございます。本日のご講演、事例発表におきましては、スポーツの振興のみならず、スポーツ施設のあり方についてのお話もあり、施設管理者といたしまして、創意工夫が求められるものと感じたところでございます。大変参考になりました。また、明日は「四日市市総合体育館」と「三重交通Gスポーツの杜 伊勢陸上競技場」の視察がございますが、大変楽しみにしております。

来年度は栃木県において開催いたします。今年8月に開業します次世代型路面電車「LRT」をはじめ、世界遺産に登録されている「日光の社寺」、日本最古の総合大学と言われている「足利学校」など、新たな成長と国内外に誇る文化を有しています。来年度はぜひ栃木県にお越し下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

結びに、第83回全国スポーツ施設研究協議大会が活発な意見交換を通じて、皆様にとって有意義なものとなりますよう期待いたしますとともに、日本スポーツ施設協会のますますのご発展と会員の皆様、有資格者の皆様のご健勝を祈念いたしまして、次回開催県のあいさつとさせていただきます。

本日は誠におめでとうございます。

令和5年6月30日(金)

施設視察

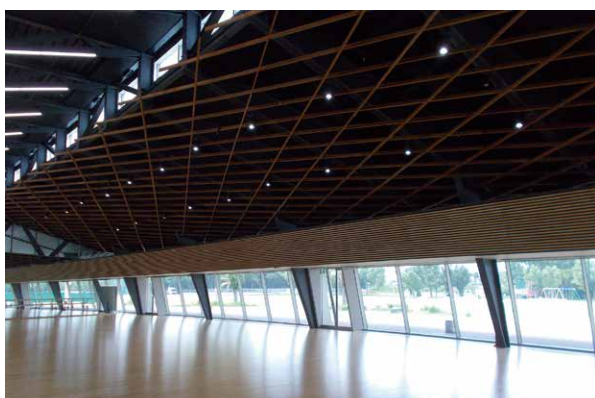
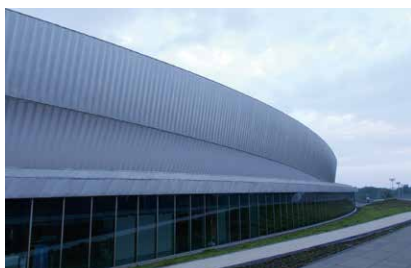
2日目は、前日の事例発表Ⅱ、事例発表Ⅲで紹介された「三重交通G スポーツの杜 伊勢 陸上競技場」と「四日市市総合体育館」を視察した。



三重交通G スポーツの杜 伊勢 陸上競技場

伊勢神宮内宮の北側にある五十鈴公園内に位置する三重県営総合競技場は、平成26年にネーミングライツの導入により現在の呼称となった。陸上競技場は平成27年から29年にかけて全面改修が行われ、WA認証CLASS2も取得した。第二陸上競技場は令和2年に第3種公認の更新が実施されている。大小さまざまな競技大会、トップアスリートからアマチュアの合宿まで対応可能な競技設備に加え、「伊勢の杜」らしく木組みを連想させるスタンド躯体の外観が仕上がった。トラックは全天候型ウレタン舗装の9レーン、夜間照明設備はメインスタンド屋根の軒先とバックスタンド側左右に1基ずつ整備されている。跳躍・投てき等の競技施設は第1種公認に適合する設備が配置されている。観客席はメインスタンドが7,114席、バックスタンドが5,388席、両方の曲走路側は芝生席で6,493人分に相当する。





四日市市総合体育館

四日市市総合体育館は、工場地帯と住宅を緑で遮断する中央緑地に整備され、令和2年5月にオープンした。アリーナは面積3,308㎡、バレーボール4面、バスケットボール3面、バドミントン20面等の競技エリアを確保し、席数は固定席3,000席、移動観覧席512席、車いすスペース32名（うち補助者16名）を有する。2～4分割の利用も可能であり、サブアリーナとしての機能をもつ既存の中央第2体育館も活用し、国内トップリーグの試合から市民利用まで様々な利用者のニーズに対応できる。また、大きさの異なる分割利用可能な多目的室2室や弓道場（遠的兼アーチェリー練習場・近的）、トレーニングルーム、大小会議室のほか、体育館利用者や中央緑地を訪れる人の共用スペースとなるスポーツフォーラムやウォーキングコース、中央緑地全体を見渡せるスカイストリートなどを配置している。